

学力の基礎をきたえ どの子ども伸ばす研究会ニュース

NO. 354

# 学力研の広場

2024. 9. 7

学 力 研 発 行

常任委員長 岸 本 ひとみ

郵便振替 00920-9-319769

ホームページアドレス <http://gakuryoku.info/>

8月4日、大阪のドーンセンターにて、学力研の全国フォーラムが開催されました。連日続く猛暑にも関わらず、全国各地から学力研の仲間たちが参集しました。会場のあちらこちらで「会えてよかった！」「久しぶり」「元気そうですね」というやり取りがなされており、年に一度、ここで学力研の仲間が一堂に会するという伝統が続いていることをうれしく思いました。コロナ禍以後、ZOOMでの会合や学習会も増えてきましたが、やはり直接会って近況を伝え合ったり、お互いの実践について話をしたり、講座から学んだことを話し合ったりすることも欠かしてはならないのだと痛感しました。

午前中は低学年・中学年・高学年・中学高校家庭塾志の四つに分かれて講座を行いました。そして午後は全体会として基調提案、実践報告、そして東北大学の榊浩平さんの記念講演がありました。どの会場も参加者の熱気に満ち満ちており、「どの子ども伸ばす」に全力を尽くす学力研教師の気概を強く感じました。各講座の内容を、常任委員の皆さんにまとめていただきましたので、当日参加された方も、残念ながら参加できなかった方も、ぜひお読みください。 (堀井)

## CONTENTS

### ◇全国フォーラム2024 各講座のまとめ◇

低学年講座	川崎和代・・・・・・・・・・	2
中学年分科会	図書啓展・・・・・・・・・・	3
高学年分科会	金井敬之・・・・・・・・・・	5
家庭塾・中学高校分科会	影浦邦子・・・・・・・・・・	6
全体会（記念講演『スマホはどこまで脳を壊すか』）	堀井克也・・・・・・・・・・	8

### ◇連載◇

「どの子ども伸ばす」を本気で考える71「意欲格差」に負けない！公立小学校へ	岡本美穂・・・・・・・・・・	10
考える力をつけるための授業の組み立て方③知識操作で思考力を育む	荒井賢一・・・・・・・・・・	12
社会科(歴史)授業力アップ講座⑩指導法研究②	深澤英雄・・・・・・・・・・	14

参加レポート「先生のための学校」	加藤英介・・・・・・・・・・	16
------------------	----------------	----

局長・常任委員長だより	・・・・・・・・・・	19
-------------	------------	----

学力研カレンダー	・・・・・・・・・・	20
----------	------------	----

## 低学年講座 まとめ

川崎 和代

「安心」「自信」から「自治」をめざす学力  
づくりと学級づくり 吉田 雅直

1年生はもともと格差のはげしい学年と  
基調提案にあります。吉田さんの講座は、  
いかに格差をなくすかという取り組みにあ  
ふれていました。

安心の場であるためには信頼関係を積み  
上げていく。それは、担任の笑顔や褒めら  
れることに始まり、ルールも押しつけられ  
るのではなく「ひとりでどくしょ」や「だ  
まつて まつすぐ はい！ たつ です」な  
どリズム感のある言い回しやポスターなど  
を掲示して、言語化・視覚化して自分たち  
のものとして定着するような工夫がなされ  
ていました。隣の席の子を単に「ペア学習の  
相手ではなく、日常的に少しづつかかか  
ることで「たよりになるおとなりさん」とし  
てつなげていました。

学習の場では自信をつけるためにも、超  
スモールステップ、特に最初のハードルを  
乗り越えることに配慮されていました。

みんなで同じことに取り組み、日々の成長  
を実感させ、説明はシンプルに、みんなが  
できることを優先する指導を、多様な教材  
とともに紹介してくれました。また縄跳び  
の場面で、跳べる過程を細分化し、できる  
ようになる手立てで構成された練習法も、  
素晴らしかったです。

「安心」と「自信」の土台がたがで  
てこそ、いろいろな場で自治的な活動にま  
でつながっていくことがよくわかりました。  
**学び方を積み上げる2年 説明文の学習**

鈴木 基久

鈴木さんの講座は、「おにごっこ」の教材  
文を読んで筆者の伝えたいことを考える  
という模擬授業的な活動から始まりました。

2年生であっても、筆者が何を伝えたか  
たのかを考えることは必要と鈴木さんは大  
切にしています。ところが学習後に、何が  
言いたかったのか？の問いに正しく答えら  
れていない実態をふまえ、「どうぶつ園のじ  
ゆうい」の学習に取り組みます。単元の初

めと終わりに「筆者の伝えたかったこと」  
をノートに書き前後での変容を見る、「水族  
館の飼育員」という説明文と読み比べると  
いうことを取り入れました。また「筆者の  
伝えたかったこと」が記述できるために3  
択問題を与え、友達の考えを聞いてまねで  
きるという手立ても考えました。鈴木さん  
の実践は、本当に子どもの実態を踏まえて  
いるなと思いました。二つの教材を読み比  
べることで、はじめ・中・終わりの構成が  
より明確に捉えられました。そしてこの説  
明文の感想文を、はじめ・中・終わりの構  
成で、「動物園のじゆうい」のこと・「水族  
館の飼育員」のこと・考えたことや気付い  
たこと）で書くことにチャレンジしました。  
説明文では「ちえ」や「しごと」などの  
抽象語の意味理解も説明文を正しく読み取  
るためには大切ということ。す。  
説明文を読み、知識を得るだけでも読者  
として価値があると思いますが、鈴木さん  
の実践は、筆者の伝えたいことや構成に着  
目し、筆者の立場意識に迫っていく実践だ  
と思えました。

## 中学年講座まとめ

図書 啓展(ずしよひろのぶ)大阪みなみ学力研

### ●「クラスのみんなと学ぶ楽しさを

算数・社会科」 根無信行(大阪)

4年生は四則計算の完成期で、「わる数が2桁のわり算」がポイント。これができるようになると子どもは落ち着く。どの子にも身につけさせたいが、商立てができない・どの数とどの数をかけるのか・位取り・繰り下がりが引き算など、つまずきの宝庫でもある。つまずきの発見のために全校で**計算力実態調査**を行い、**結果を元に九九やくり下がり引き算の基礎計練習(さかのぼり)**をして学習に入った。

学校として学年ごとに型分けされたB5プリントやタブレットに配布できるデジタル版も整備。苦手な子の補充プリントとしてではなく、学年でいっしょに取り組み、**自分の記録と比べて伸ばす**ことがやる気を引き出す。

「わる数が2桁のわり算」では、アルゴリ

ズムはみんなで声を出して一緒に唱える。

「たくてる・かくける・ひくく・おろす、たくてる…」と「十人のインデアン」の節で歌い、身振りと共に楽しむ。個別学習にならぬような色々な型の筆算を「**みんなで一緒に**」する。全員で唱えながら、解いていく。

楽しく取り組める「**わり算忍者**」(大達和彦先生作・メール daichi@able.ne.jp)のグズ(指かくし法の指や仮商修正の「できま手裏剣」なども活用。全員で声を出しながら解いていく時間をたくさんとった。前に出て黒板に式を書く↓商の立つ位を見つける↓商をたてる↓かける…と一人ずつ、また列単位で問題を解かせていく「**わり算リレー**」で慣れさせた。

班活動で教え合うことで日頃と違う交流が生まれた。宿題(統一したプリント)も放課後残って一緒にやって帰る取り組みで、課題のある子の計算力も改善できた。

計算にかかる時間の差が縮まると、授業のテンポを調整しやすくなる・計算にかかると待ち時間が減る・一斉に授業を受けている雰囲気ができる、等の成果が生まれる。

「みんなですすめると、同じ課題にクラスメイトの意見も聞きながら参加でき、個別ではなく一斉授業を通してわり算筆算が乗り越えられる。

社会科は、支援学級児童を含めた全員参加の授業をめざした。授業の冒頭は「かっとなげせ! 都道府県」や「都道府県クイズ」をやつて楽しむ。「みとくらし」など、副読本の記述を穴埋め方式にしてロイロノートで答える形で進めた。「くらしと水」では参観用のスライドが講座参加者に紹介された。個別化ではなく、「**クラスのみんなと楽しく学ぶ**」大切さを柱とした報告であった。

### 【感想文から】

・学習の個別化、指導の個別化と言われていますが、同じ課題に向き合っていくために、つまずきの克服・さかのぼり学習をどのタイミングで、どの程度とりにくんでいくといいのかも考えなくてはいけないと感じました。

## ●「中学年の子どもの良さを生かす

### 学力づくりと授業づくり」岡本美穂(大阪)

3年生は小学校で最も好奇心あふれた学年だが、先生への反抗が出てきたり、みんなの前で発表することを嫌がる子が出てきたりする。4年生は小学校で最も安定して頑張りぬく学年だが、冬休み頃からプレ思春期の入口で男女とも変化してくる。3・4年は何事にも熱しやすく冷めやすい学年で、基礎的な学力の格差を解消し、安心して学べる環境を作ることが大切。学力づくりでは1・2年のつまずきを克服することで輝き出す。さかのぼり学習を取り入れ、同じスタートラインで学習できるようにしたい。発表が少ない4年のクラスで、国語科の「走れ」の学習を一元担当した。

一時では「初発の感想を交流しよう」をめあてとして設定。自分の初発の感想をペアで話し合うことからスタート。頼りになるのはお隣さん。また、のぶよの視点で物語が書かれていることを押さえると共に、けんじがなぜお弁当を嫌がったのかなど疑問を共有した。授業の終わりには「振りかえり」を書かせる。

授業後は、指導者が授業での子どもの良かった姿を「国語通信」にまとめ、知らせる。「交流しよう」というめあてを達成できている人がたくさんいました！

・授業がはじまる前から音読していた人さすがです。

・○さん △さんの「のぶよ目線」という言葉のよさをふりかえりに書いてくれました。……

二時間目の後の国語通信からは、

今日のナイスペア賞 ○さん■さん……

というように発表した。その後も、

◇さん 音読で一文一文字、大事に読むことができていました！みんながパンツという読み方のうまさにはびっくりしました。など、素敵な子どもの姿を評価していった。

この取り組みの中で、発表力や音読の力、文章を書く力などがグングン伸びていった。初発の感想が3行しか書けなかった子も、学習まとめの「振り返り」では14行書いた。

学力づくりや授業づくりを通して、みんなが賢くなる学級になっていくことをめざしたい。学級は共有財産である。学級でオキシトシンが溢れるようにしていくために、

「頼りになるのはお隣さん」の取り組みが大切。親切は、実は脳に効く。親切は、それを

目撃した人の気分を高め、別の人にもその親切を伝えようという気分にさせ、ほかの人たちの気分まで高めていくというドミノ効果を生む。「ああ」という共感が思いやりに発展し、さらに親切へとつながり「ありがとう」が溢れる学級へとつながる。親切は、ドーパミン・セロトニンの分泌量を増やし、絆のホルモン「オキシトシン」も作り出す。

4年生頃から教科書に出てくる言葉はぐつと難しくなる。ペアで読み上げ漢字(読みを先行)させ、うそテストをし合う。学力をつける過程を学級づくりにつなげよう。やる気を引き出すには、「できる」を積み重ねること。学力をつける過程で自信をつけることが学級づくりの根底になる。

子どもたちが授業での関わりの中で変わる、圧巻の報告だった。

### 【講座の感想文から】

・岡本先生のおっしゃられた「ああ」「ありがとう」をまずは自分がたくさんの子どもたちに伝えられたらなあ、と思いました。

・何回か来てますが、何度来ても感動します。

○授業で子どもや学級を育てる

丸小野聡暢(大分)

報告者は「授業自治」という観点で実践を積み重ねてきた。授業自治とは、授業の中で自治を育てること、子どもたちが主体的に課題解決に取り組むことである。

具体的には、学級のシステムや授業のありかたを子どもたち自身の意見で「手直し」できるということである。

教師からの一方的な指導では(たとえそれがまちがっていないなくても)子どもたちに「やらされ感」が生じ、やる気が起こらない。これは大人も同様である(今の学校現場の閉塞感は、教師の自由度が奪われていることが大きな原因だと思う)。

体育の実践では、体育の授業の目的を、「将来にわたる豊かなスポーツライフを送れるようにする」ととらえ直し、ボール運

動では、ゲームをする中でメンバーの技術の向上や楽しくプレーできるようにルールを工夫していく様子が動画とともに報告された。技術習得のための単なる反復練習ではなく、対話をしながら技能練習をしておく子どもたちの姿が印象的だった。学級は安定性と主体的活動性があつて、多様性が生まれる。特別活動の中だけに「自治」を限定しないで授業の中にも「自治」を追求する報告者の実践は、子どもたちの意欲と学力を高める実践だと思つた。

○学力づくりで学級づくり

加藤 英介(愛知)

学力づくりと学級づくりの基本は、「子どもたちの思いに寄り添う」ことであると報告者はいう。

始業式から教室に入らず廊下にたむろする数人の子どもたちがいるクラスの担任に

なった報告者は、徹底して子どもへの思いに寄り添うことを大切にしながら学力づくりと学級づくりの実践を重ねていく。「こどもに寄り添う」とは、現在の見える子どもへの現象だけではなく、過去の見えな現象にも思いを馳せ、その子の成長、発達を信じ、かしくなりたいという思いを汲み取り、その子が意欲を高めていく実践を模索し続けることである。

表出する問題行動だけを高圧的に「指導」するのではなく、子どもたちが過去から積み重なってきた「しんどい思い」に共感し、できるようになりたいという思いを感じ取り、その思いを実現させるために学力づくりの実践を積み重ねてきた。

絵になる100マス計算、読み上げ計算、ペア音読、新出漢字の学習、ノート指導、社会の実践など、さまざまな学力づくりの取り組みの中で、指導困難な子どもたちも徐々に学習に意欲を示してくる。

報告者の的確な子ども観、深い洞察力、柔軟な対応力、絶妙なきっかけづくり、巧みな言葉がけで、子どもたちが学力をつけていく様子が伝わってくる報告だった。

# 中学・高校、家庭教育分科会まとめ

影浦 邦子

## レポート2本と学力研全体講演

### 意見交流

今、様々な辛さを抱えた子どもたちがかつて無いほど増えています。子どもたちにとって、学校は最大のものである筈ですが、豊かな学びの場所とはなりにくい現状です。

午前の報告では、「家や学校が子どもたちにとってほっとする場であることが子どもたちを支えていく」ことが語られました。午後から、子ども達が学校でしつとりと落ち着き、自ら伸びていくこうとする姿の報告を聞き、しつかりと学ばせる取り組みによる一つの活路を見る思いがしました。また榊氏の講演は、期待に違わず最優先課題を学ぶ重要なものでした。盛り沢山の学びと、活発な意見交流で充実した大会となりました。

### ◆午前の部◆・・・家庭塾連絡会レポート

※「幸せの扉をたたく」

何をすることが子どもたちを支え、

希望を切り開けるのか？

恩庄 澄さん（京都・中学）

「学び」に「特化」、「スタンダード」化：等々、「規格外」の子たちはほとんど居つらくなる学校、しかし、我が子を学校に通わせたいーその親子のジレンマの中で、「子どもたちは何に傷つき、何を求めているのか」・・・その時、何が救いとなったか具体例を示して語られました。

1、子どもたちを追い詰めている「傷」とは、

- ・塾・部活で競争に↓「孤立無援」↓疲れ、自分自身を見失う。
- ・家庭不和↓自分が大事にされない。↓「みんなと楽しく過ごしたい」↓学校が救いに。
- ・勉強が解らない↓学校に行きたくない。

2、家庭や学校に今求められているもの・・・子どもたちは癒しを求めている

- ・ほっとする場（競争で追い立てられない）
- ・「・・・ねばならない」を排し、仲間と自由に話せる場に。

・教師や親に話を聞いてもらえること  
3、家・学校・友人の二面性を見つづ、反転させる可能性を探る

・家や学校の機能、激しい競争で「孤立無援」の状態↓それを反転へ。

・「働き方改革」もある意味2面性↓バラバラ促進の皮肉な面も。

家庭訪問も廃止、連絡も一斉送信で終わり・・・繋がり希薄化

・家庭の機能⇒音楽、ゲームで「他の世界」に行き自分を癒してる。

・荒れ仲間、不仲の親・・・それらも反転の可能性探られたら。

恩庄氏は学級定員の大幅削減を強調されました。40人ではとても一人一人見られず、しんどい子はどんどん弾かれる。また、管理職が学テの結果に翻弄され、文科省の言うがまま現場はどんどん窮屈・疲弊しており、倒れる教師続出。あまつさえ、管理職が子や親の前で担任をのしる、追求する等が頻発。教師のケアや学級定員削減は急務だと強調されました。

また参加者から、「忙しくて学年内の打ち合わせ・教材研究や、先輩教師との話・相談など不可能になって、教師自身が孤立し、不安抱え、子どもたちを受け止めきれなくなつて

いる。親の苦境も増している。教師・家庭・子どもたち各々に救いや繋がりが必要だ」との発言がありました。

(※どれもこれも、十数年前までとてもあり得なかつた事ばかり)

### ◆午後の部◆・中学高校部会レポート コロナ禍で成果を上げた学力づくり

その後

阿久澤恵子さん(群馬・中学)

コロナ禍の迷いの中でも、学力研で学んだ「基礎基本を大切にした継続的な課題として、何をどうやって子どもたちに提示していくのか、それこそが子どもたちを伸ばす鍵である」と再認識し、教師も子どもたちも共に進んできた。

漢字学習、基本割り算、音読、新聞学習、作文、生活指導等々、子ども自身が成果を自覚し自尊心を持った多くの取り組みの中で、4分割ノート学習(ノート1Pを4つ折り、学校使用のワークの答えを同じ問題で即答できるよう4〜7回くり返し答えを書く)の取り組みに注目が。

阿久澤さんは「タブレットでないと出来ないの?」と「鉛筆でノートに書くこと」を徹底的に重視し、ダブル主流校が学力低下を招

いているのとは逆に、自校が前橋で一挙高成績をあげた結果を示しました。

阿久澤さんの中学を訪問した「書き方研」の前田さんは、「子ども達のしつとりとした様子に驚いた。タブレットは自動的に美字に変換で意味がない。PISAもだんだん学力低下指摘している。」と。

報告の中で、卒業生たちの「中学生生活を振り返って」というアンケート回答の中の意欲や希望に溢れた文が沢山紹介されました。高校で突然伸びた子は、「面倒な事が一番力がつく」とわかった」と述べ、他の子たちも「全部、力に変えられた」、「学校生活で何ものにも代え難いものを学ばせてもらった」、「めっちゃ楽しかった」、「周りの先生たちにとってもお世話になって、とても感謝してる」、「あの時間を大切にしている良かった」、「充実した日を送れた」・・・等々、「凄い・・・」と思える文がズラリ。

「子どもたちが、中学校生活に充足感と満足感を得て卒業していったことを知り、心から嬉しく思った」阿久澤さんは述べています。まさに、教師冥利に尽きることでしよう。また阿久澤さんは、「子どもたちの話を聞いているだけで、『解決策』なるものは与えていない。聞いてもらえる」、「声かけてもらえる」こ

とが大事だ。」と述べて話を終えました。

### 参加者の感想文から 一部紹介

(一部文の省略あり)

※恩庄先生の生徒さん達のお話はとても感動的でした。ほっとできる場所やりたい事、人間関係、心のより所が大切だと。阿久澤

先生の基礎学習の大切さ、反復練習、毎日コツコツ、学習方法、また家庭でも取り組みたいです。充実した濃い内容で有難うございました。(T・Aさん)

※初めて参加させて頂きました。恩庄先生のレポート、とても興味深く聴かせて頂きました。一人一人と向き合う姿勢と愛情を強く感じました・・・今できる事に目を向けて実践していきたいです。(M・Aさん)

※恩庄先生の温かい声かけが生徒さん達の後には大きな影響を与えたのだらうなと思いました。色々な意見を聞かせて頂き興味深かったです。やはり、対面集会はいいいですね。有難うございました。(Eさん)

※夏休み明けの日々に向けてパワーを頂き、また具体的にどのように取り組んでいこうか、考えながら学ぶことができました。レベルアップや研究、向上心を持って頑張っていきたいと思いました。(Nさん)

## 全体会 まとめ

堀井 克也

### ○実践報告「しあわせな学級づくり」

李 詩愛

学年団で話し合い、「親切」「ありがとう」「和」「成長」の四つの思いをこめた学級目標「しあわせ」は、学年団でよく話し合っ  
て決めたものだと言われました。岡本先生  
と同じ学年を組んだ時の経験を大切に、学  
力研での学びを生かして学力づくり・学級  
づくりに取り組みました実践の報告でした。

最初に動画を見せながら「音読」につい  
てのお話がありました。学力的に厳しい子  
でも、おとなりさんとペアになって音読す  
ることで、意欲的に取り組むことができ  
ていました。ペアからグループ、学級全体へ  
と関係を広げていき、リレー音読が成功す  
ると牛乳で乾杯してみんなでお祝いしたそ  
うです。子どもを孤立させず、音読を通し  
て互いの成長を喜び合う関係を構築してい  
くことでどの子どもも伸ばす取り組みでし  
た。続いて「ノート指導」へのこだわりにつ  
いて話されました。一人一台のタブレット

が当たり前になったことで、ノートに手書  
きすることの意味が問い直されていますが、  
東京大学教授の酒井邦嘉氏の発言にも触れ  
て、「手書きは時間がかかるけれど、その分  
書きながら考えることができる。一方タブ  
レットを使えば効率化が図れるけれど、そ  
れが学びにとって良いかどうかはわからな  
い」ということでした。ノート指導につい  
て「ていねいに書く」ということと「自分  
の考えを書く」ということを常に意識する  
ように指導されているそうです。具体的な  
内容として「巻頭詩の視写」「連絡帳を書く  
ための五分」「国語の初発の感想」「主発問  
に対する答え」を出されていました。また、  
ノートもそのまま写すばかりでなく、段階  
的にステップアップして、大事なところを  
選んで書くように指導しているそうです。  
「学力研で学んできたからこそできた実践  
これからも子どものしあわせをつくってい  
く」と力強く語った李さん。学力研の仲間  
として、志を同じくしてがんばりたいです。

### ◎記念講演

「スマホはどこまで脳を壊すか」

榊 浩平さん

榊さんの講演の準備が始まると、会場に  
は「待つてました」という雰囲気は満ち満  
ちました。私自身、同名の著書を読んで  
感銘を受け、楽しみにしていた一人でした。  
前半は「リスクを知ること」について、  
そして後半は「上手に活用すること」につ  
いてでした。人類は道具を發明し、使いこ  
なして発展してきました。リスクを知って  
忌避するのではなく、上手に活用するため  
にはどうすべきかを学ぶことが大切だとい  
うお話に、深くうなずかされました。

脳の中でも「前頭前野」が考える・理解  
する・覚える・我慢する・人を思いやる…  
などの人間にとって大切な働きをしている  
ため、ここを鍛えることが子どもにとつて  
も大人にとつても重要であり、そのため  
はたくさん使うことだということでした。  
特に0～3歳、9歳～18歳に急に成長す  
るそうなのですが、スマホの使い過ぎがそ  
れに悪影響を及ぼすようなのです。

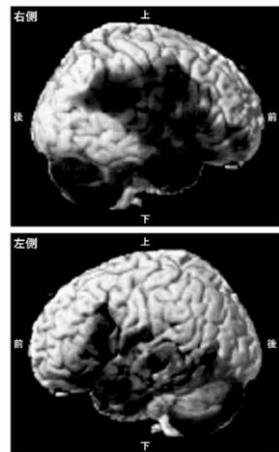
「スマホの使用と学力の関係」についての

お話では、スマホを一日3時間以上使っていると努力しても学力がつかないこと、「ながらスマホ」状態で3時間学習するとスマホ無しで30分学習するのが同じ学習効果であることなどの研究成果を紹介されました。本人には悪気はないのに、努力が報われないのだとしたら、悲劇です。

「スマホと脳活動」に関して、本とスマホで言葉の調べ学習をした結果、本では1分で3個、スマホでは5個調べられたものの、脳の活性化という点で見るとスマホでは脳が全く働いておらず、その結果後で一つも思い出せなかったそうです。調べものをする目的は何なのかを考えて、手段を選択すべきであり、例えば時刻表を調べるならスマホでもいいけれど、調べて得た情報を知識として自分のものにしつつ脳を鍛えようと考えると、手間のかかる本で調べることが取って代わらなければならない。

この日一番のどよめきがあったのは、スマホの使用と脳の発達の関係についてのお話の最中でした。中学生の子どもたちを三年間追跡調査した結果、スマホの使用によって、画像の黒くなっている部分の発達に

悪影響が見られたというのです。



出典：「5歳児ほどまで脳を萎縮した」

脳は目には見えないけれど、内部では恐ろしいことが起きつつあると知って驚きました。ところが、2歳児のネット利用時間は平均120・9分に達しているという事実に、思わず「えっ：」と声が出ました。

後半は、こうした現実を踏まえて、私たちはスマホとどう付き合っていけばよいのかというお話をされました。

榊さんが関わった宮城県のある小学校では、先生たちは極力口を出さないようにし、代表委員会を組織して学校全体でめあてを考えたそうです。自分たちでルールを決めたことで守ろうとする意識が働いたこと、クラスや学校全体で取り組んだことで他律の効果もあったとのことでした。

家庭での生活習慣づくりも欠かせません。まずは起床と就寝時刻を守るところから。そして、家族で「①スマホのリスクを知る②話し合う③ルールを3つ決める④2週間取り組む⑤ふり返り」という取り組みをしてみることを勧められました。やってみると子どもの方ががんばるそうです。これは、私も家族とやってみようと思いました。

また、将来の夢の有無も大切なのだそうです。やりたいことが無い子がスマホやゲームに依存しやすいので、家族が関わって将来について話し合う機会をもつようにするべきだそうです。

講演の最後に「教育に愛と理念を取り戻そう」と力強く訴えられた榊さん。「皆さんの方が答えを知っているはず。目の前の子どもの姿に答えがある。そこから始めてほしい」という言葉に、聞いていた多くの人たちが胸を打たれたと思います。大人がキラキラした姿を見せて手本とならない限り、子どもたちには大切なことは伝わりません。夏休みが明けて2学期、そんな姿で子どもたちの前に立てるように、残りの夏休みで豊かに学ぼうと決意しました。

「この子も伸びます」を本気で考える連載 7-1

## 「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長 岡本 美穂

### 全国フォーラム 岡本講座 構造

- 1, あいさつ 5分
  - 2, 今日の講義で何を一番学びたいか・知りたいこと アウトプット 5分
  - 3, 3年生、4年生ってどんな学年ですか？ 4分
  - 4, 講義のダイジェスト 5分
- 国語の宝箱 読みなどを映像などで紹介
- 初発の感想と終わりの感想の変化 量と質の両面
- 「魔法ではなく、しかけをした」
- 5, 指導の具体 何をしたか！国語通信を紹介 25分
- ペアー指導のステップの紹介

ナイスペアー賞

音読の声・ペアー・聴くこと大事・

授業の振り返り

国語通信をロイロノートで書かせたものをしめす

「ペアーで言います。」

言葉の宝箱を貼っていく(学習用語)

「自分の脳は自分で鍛える。みんなで鍛える」

「学級は共有財産」

学力づくりⅡ学級づくりへ

「学級 オキシトシン」(親切は脳に効く)

有田和正 2つのこと

「ありがとう」

読み上げ漢字 ペアーで

うそテスト

出会いのイス

意味をもってやると自信につながる

### 6, まとめ 2分

学びあい 支えあい のびあい  
アウトプット ふりかえり  
解決しないことはQ&Aで

### 感想

1, 岡本さんの講座は上記のような構造になっていました。岡本さんは熱心でいつも講座の時に私に感想を求めてくれました。とても嬉しいし有難いです。今回講義を受けてみて感じて、岡本流の講座が確立されつつあるなと思いました。守破離で言うところの「破」の段階です。

「守」とは師の教えを忠実に守ること、つまり基本の段階です。「破」とは自分で考え工夫すること、つまり自立の段階です。と言われます。「離」とは独自の新しい世界を確立すること、つまり創造の段階を指しています。常識や思い込みなどの既存概念を打ち破ることです。ただ漫然と教えられたとおりにやるのではなく、本当に正しいのか？ 解釈が間違っていたりしないか？」と疑ってかかり、正しいということを確認

めることです。自分が正しいと思ったことも「本当に正しいのか？正しいならその理由はなんだ？」って、りくつをきちんと把握することで、「離」という段階へ進みます。岡本さんはこの域に入ってきているなど講座に参加して感じました。岡本さんは自身自身の形を確立されています。

2, その一つは、講義のダイジェストを入れたことです。テレビはこの形ですね。本編で紹介する内容を短く見せることで、視聴者はわくわく感を高めます。岡本さんの講座はこの形です。講義への関心興味を湧かせる工夫のある講義でした。参加者が岡本先生はどう指導したんだろうと主体的に参加するのを促していました。一方的に語るのではなく参加者（オンラインの参加者も含め）を巻き込む講座でした。（省略）

←

これは、深沢先生から頂いた貴重な講座のご意見です。私は、毎回講座の感想を聞くようにしています。それは、最近のZOOMでの研修会に危機感を抱いているからです。正直、ZOOMではなんとでも（まかしがきく

イメージです。以前市の教育フォーラムがあった時も、ある学校が報告していたのですが、子どもの姿がそこにはなく「取り組み」ばかりを伝え、そこだけの評価されている姿を見ました。なんだか、それは真実ではない気がしています。そして学力研のZOOM講座でも同じことを感じています。子どもの姿、子どもの成長、子どものノートのコピー、子どもは嘘をつかないので、説得力もあります。これはZOOMではなかなか難しいので、対面講座でそういう方向ができるようにならないといけないと思いました。

授業自治ゼミでも、その点を意識して伝えていこうと思います。

「オキシトシン」と共感、「ありがとう」という言葉は学級づくりの「核」にはなっていくと思うので、その部分はふれずに主張できるように実践を続けていきます。

## ■学校に来て学ぶ意味

ある実験

【中学1年生で計測】

➤のグループ … みんなで体を動かしながら英語の歌を歌う活動を行う  
Bのグループ … 紙の教材を使って一人ひとり別々の問題を解く。

→

### 脳の活動の計測の解析の結果

➤の方は「脳活動の同期がみられた」

Bのグループは同期が見られなかった。

この結果より、脳活動の同期は、集団で協力して同じ行動や作業をしている時に見られ、一人で黙々と作業をしている時には見られない。だから、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業を行うことで、子どもたちの脳が同期し、クラスの雰囲気が高くなったり、仲が深まったりする可能性がある。あるといえるのではとのことでした。

つまり、授業形式によって子どもの脳活動は変わる、ということ。そこを意識していくことで、今後の実践は変わっていくのではないのでしょうか。「B」を使用することが目的では、ありません。目的は「どの子ども伸びる」「どの子ども伸びず」ということです。そのために必要なことをするだけです。

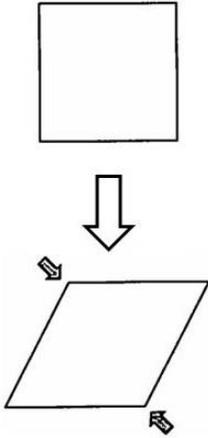
## 知識操作で思考力を育む

「知識」があっても、それらを活用できないければ、宝の持ち腐れである。

「知識」を活用することを「知識操作」と定義する。そのうえで、次の問題を解いていただきたい。

10 cmの細い棒を四本つなぎ合わせて正方形を作りました。棒のつなぎ目は自由に動かせるようになっていきます。矢印の方向に少し力を加えて正方形を変形しました。もとの正方形に比べて面積(広さ)はどうなつたでしょう。

- ア 広がった    イ 狭くなった  
ウ 変わらない    エ わからない



ところで、上記の問題を正しく解くためには、どんな知識を持っている必要があるだろうか。

### 【二年】

・4つのかどがすべて直角で、4つのへの長さがすべて同じになっている四角形を正方形といいます。

### 【四年】

- ・1本の直線に垂直な2本の直線は、平行であるといいます。
- ・向かい合った2組の辺がそれぞれ平行な四角形を平行四辺形といいます。
- ・4つの辺の長さがみな等しい四角形をひし形といいます。

・正方形の面積  $\parallel$  1辺  $\times$  1辺

### 【五年】

平行四辺形の面積  $\parallel$  底辺  $\times$  高さ

(四角形や高さの定義は省略。)

こうして必要な知識を挙げてみると、算数の学習は、知識の積み重ねの上に成り立っていることがよく分かる。

さて、上記の「等周長問題」は、工藤与志文・進藤聡彦・麻柄啓一『思考力を育む「知識操作」の心理学活用・問題解決力を高める「知識変形」の方法』の中に載っている。

この問題、子どもから大人までの半数が「周りの長さが等しいから面積も同じだ」と直感的に答えて間違えそうだ。しかも、平行四辺形の求積公式を学習した直後の5年生が一番、誤答が多かったという。

この問題、「平行四辺形の面積  $\parallel$  底辺  $\times$  高さ」という知識があれば、正解の「狭くなった」と答えられるはず。

しかし、半数以上が正解できないのは、右の知識を操作し活用できないからだ、というのである。

個別的知識と一般的知識

チヨウは足が6本ある。

トンボは足が6本ある。

このような知識を「個別的知識」という。それに対して「一般的知識」とは、

「こん虫は足が6本である。」  
というものである。

一般的知識は、知識操作（代入操作）すること、個別知識にすることができ、  
アリも足が6本あるから、こん虫である。  
というように。

### 平行四辺形の面積＝底辺×高さ

これは、一般的知識である。この知識は  
変換できる。例えば、

底辺が同じ場合、面積は高さのみで決まる。  
というように。

さらに、

底辺が同じ場合、高さが低くなれば面積  
は小さくなる。

というようにも変換できる。

正方形を押し変形させると、その図形  
は平行四辺形（ひし形）になり、高さは正  
方形のときより低くなる。

でも、これらのことが、多く子にとって  
は、当然ではないのだろう。

教師は「知識」を教えるだけで、それを  
使って子どもが活用できると思ってしまう  
が、それは誤解、妄想である。

知識を操作し、個別知識を一般的知識  
に、一般的知識を個別知識に、変換させ

ていくことを日々の授業の中で行っていく  
べきなのである。

### 授業プラン「肉食動物・草食動物の歯」

「ライオンやトラのように、他の動物の肉  
を食べる動物を肉食動物といいます。」

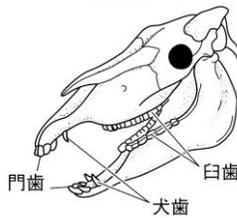
知っている肉食動物を発表させる。

「羊や牛のように、草を食べる動物を何と  
いうと思いますか。」

・草食動物。

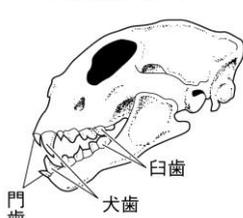
同じように知っている草食動物を発表さ  
せる。

草食動物（ウマ）



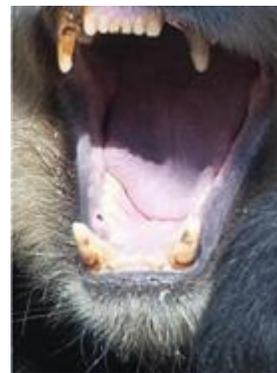
その後、肉食動  
物と草食動物を対  
比させる。（略）  
上記の図を提示  
し、違いを発表さ  
せる。

肉食動物（ネコ）



その発表の中で、  
「肉食動物はとが  
った歯をもつ」こ  
とを一般的知識と  
して確認する。  
さらに、「ライオ  
ンはとがった歯を

もつから肉食動物である」というように、  
知識操作（代入操作）をさせていく。



「この写真の動物は、肉食・草食のどちら  
でしょうか。」

・とがった歯だから肉食動物。

実は、右の歯は、パンダの歯なのである。

・パンダは笹の葉を食べるのに。

「パンダは草食なのに、なぜ、とがった歯  
をもつのでしょうか。」

・昔は、肉食だった。

・実は、肉も食べるのかも。

「実は、約800万年前のパンダの祖先は、  
肉も草も食べていたそうです。」

一九九一年四月四日の『朝日新聞』の  
夕刊に、中国で野生のパンダに、飼育し  
ていた羊の子供が食べられる、という事  
件の記事が載っていることも紹介して、  
授業を終える。

一、ICTをどう授業で活用するか？

最近、校内研修で呼ばれて、研修前に質問を書いてもらうと必ず書かれている内容がICTについてです。

「授業の中でどうすればいいですか？」

「どう使えばいいですか」「使い方の事例を教えてください」等があります。

教育現場では、「IT」ではなく「ICT」という言葉がよく使われています。

Information and Communication Technology

情報通信技術のことで、通信技術を利用したコミュニケーションのことを言います。

ICTを活用した授業として文部科学省は3つのステップを考えています。

ステップ1：「すぐにでも」「どの教科でも」「誰でも」利用できるようにする。

ステップ2：教科の学びを深め、教科の学びの本質に迫る利用ができるようになる。

ステップ3：教科の学びをつなぎ、社会

課題等の解決や一人ひとりの夢の実現に活かす利用ができるようになる。

どんな技術もそうですが、メリットとデメリットがあります。デメリットには、十

分気をつけながら、目の前の子どもにとって、ICTを使うことのメリットを考えていかざるを得ないのではと考えます。

「授業が楽しくなる」「授業に参加しやすくなる」が大事です。

二、社会科におけるICTの活用

文部科学省の資料によると、小学校の社会科でのICT活用は、情報収集をする過程で「何が必要か」ということを読み取ったり、さらにはその情報を分類や整理してまとめたりしながら、共有していく授業の構築がポイントになるとされています。主な学習過程のイメージとしては、学習課題の設定後、社会のさまざまな事象を知り、

クラスで問いに対する気づきや疑問などを出し合います。次に、課題解決の見通しとして、問いに対する予想や仮説を立てたり、それに対する調査方法を考えたりしながら、調べることにつなげていきます。

この調べるという過程では、下記三点がポイントに。

- 1、情報を集める
- 2、情報を読み取る
- 3、情報をまとめる

ICTの活用は、これらの「調べる」過程において、とても有効だと言えるでしょう。

三、授業の中でICTでしかできない事を

十年前に大学に勤務するようになり、毎年させていたでているのが、社会の模擬授業です。示範授業という名になっていますが、学生を小学生に見立てて小学校社会科（六年歴史）を行い、二限目には、授業の解説と社会科の教材研究、授業構成について講義するというスタイルです。

最初の二・三年は、小学校時代にやっていた授業をベースに、学生に授業をしていました。ちょうど、ICTの利活用の流れ

が来ていました。

社会科でICT活用は、調べ学習に使う事を、まず思い浮かべるし、確かに便利だと思えます。

私は、その時に授業の中にICTをどう取り入れたらいいかを考えました。私にはICTの技術はほとんどありません。しかし、これまで長年授業の中で指導方法を工夫してきた蓄積があります。やってきた指導方法の中で、ICTを使った方が、「便利で、子どもたちの理解」が進む箇所はないだろうかと思案しました。

「黒船来航」「長篠の戦い」の授業をし、次年度の教材は、「出島」にしようと思案しました。「出島」の授業というと、若い時に読んだ、有田先生の有名な実践が思い浮かびました。もう一度読み直しもしました。他の出島の実践記録や出島に関する専門書も読みました。自分が現場の時の行った実践記録も確認しました。

歴史の授業を作る際にできるかぎり歴史の現場に行くことを続けてきました。出島についての本を読むなどの準備をし、一定の知識がはいった後に、長崎の出島に行く

ことにしました。

出島は、今は埋め立てが進んで島では、



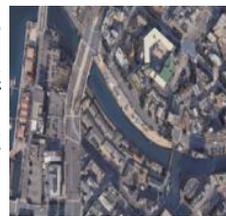
ありません。江戸時代には海だった場所に、市電が走っていました。現在復元工事が行われ、徐々に江戸時代当時の姿が取り戻されつつあります。

出島に入るための橋ができています。その橋を渡り中に入りました。第一印象は、「狭い」ということでした。教科書の絵図などを見ての印象からいうと、「もっと広い」のではないかと思っていました。

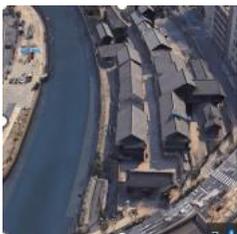
歴史事項を教える時に大事なことは、どの場所にあるのか、それはどれぐらいの大きさなのかを実感をもってもらうためにどう工夫するかということです。

これまでは地図帳を使っていました。地図帳を使用することはやりながら、ICTの活用を進めることにしました。Google Earthは、とても便利です。地図帳では

きない操作ができ、子どもの理解を助けることができます。



地図帳で長崎県を確かめてから、長崎県をGoogle Earthで空中からの映像で見せて、出島がどこにあるか予想させます。そのあと、映像を教科書の図と同じような場所から見ているように動かさすことができます。Google Earthの機能はすごいです。私はICTの技術を持っていないので、「こんなことができるかな」と、ICTに長けた先生に相談して作ってもらいました。場所に確認はこれで行きました。次は、出島の大きさです。



## 先生のための学校

加藤 英介

はじめに

「教師の給料が13%上がる!？」というニュースの背景について、魅力ある仕事ではなくなったことや働きすぎていることが挙げられた。現場では、保護者対応や問題行動が頻繁に起こる。その原因は、教師が好き勝手にしているからだという意見もあるため、〇〇スタンダードやルールの揭示などが多くの学校で見られる。授業は指導書通り、カリキュラム通り、言われた通りに取り組んでいてよいのだろうか、そんな疑問が浮かんでくる。

目の前にいる子どもたちは得意なこと、苦手なことが違うにも関わらず一律同じ指導でよいのだろうか。本当にやらなければいけない仕事は「子どもたちの可能性を伸ばす」ことである。そのために教育の自由がある。研究をしたり、指導を工夫したりしてその子に合わせた方法で取り組む必要がある、クラスの実態に応じた取り組みが必要不可欠である。そのような前向き

な実践は認めるべきである。教育の自由も、勝ち取り、魅力ある職場にするためにも、実践を積み重ねることと交流する場が必要である。

### 講座A

竹田有希先生からは「計算づくりで学級づくり」についてのお話があった。計算づくりは、読み上げ計算と百マス計算を使って指導している。読み上げ計算は、志水廣先生の本を使用している。算数の授業の最初に行い「昨日の自分を超える」を合言葉に、1分間でどこまで言えるかということとを競う。まずは自分で、次にお隣さんと取り組むことで、短時間でより多くの問題を解くことができる。百マス計算は帯時間に、5分間行う。5分で終わらない場合は解けた数を記録する。正解数が昨日より多ければ◎などを付ける。これらの良さは自己肯定感を高めることにつながる。

昨日の自分と比べることを目標にする

ことで、1問でも1秒でも伸びたことを大いに褒めるとともに、伸びる時期は一人一人違うことを伝える。その時には、どこがどのようなよいかを具体的に伝えていく。もちろん、うまくいかず悔しい思いをする子もいる。どこにつまずき、何を練習すれば良いのかを個別に指導し、きたえていく。計算を続けることにより、学ぶことに対して粘り強くなり、学力格差を縮めることにもつながる。掛け算、足し算、引き算をクラスの実態に応じて繰り返し取り組むことにより、次のステップである割り算という大きな壁にも前向きに挑戦しようとする心も育てることができる。

全員で達成したり、記録賞を渡したりすることで、「次も頑張ろう」「計算だけでなく他の目標も達成したい」という次への意欲を引き出すことにもつながっている。できたことをみんなで増やし、喜びを共有することで学級の力も高めることができる。

### 講座B

「教材解釈 授業実践」について、岡本美穂先生から、物語文の実践報告があった。

学力研でも大切にされている共同学習を中心に「学び合って支え合って伸びあえる研究会」「みんなで賢くなる学級」「自分の脳は自分で鍛える みんなで鍛える」「学級は共有財産」など、大切にしている言葉が多くあった。

授業は、子どもたちが学びに喜びを感じて成長する時間。国語においては、初発の感想と終わりの感想を比べれば、子どもの力を知ることができる。最初はわかったことや面白かったこと、あらずじを書く子がほとんど。それが、最後には、場面ごの内容だけでなく、自分の意見や考え、仲間から教えてもらったことなど、教科書から広がる学びを書いていた。文章の量からも「書きたい」という気持ちに溢れていることがわかる。大江健三郎さんの「書きながら考える」という言葉にもある通り、毎時間、振り返ることで書く力をつけることができた。

書く意欲を高めるためには、授業内のきめ細かな指導が必要不可欠である。物語文の一時間目には「物語を読んで、感想を交流し、問いをもと」というめあてで取り

組む。物語とは…感想とは…交流とは…と言葉にこだわりながら、気付かせたり言語化したりして問いをもたせていく。授業後には、できたことやわかったこと、その子の良さを見つけて国語通信を書き、次の時間へとつながる学びにする。二時間目からは「あらずじ理解」と「つきたい力」を中心に、場面ごとに題名・副題をつけたり、中心人物の気持ちを考えたりして「頼りになるのはお隣さん」を合言葉に共同学習を進めている。最後はビフォーアフターカードで感想を交流する。

今年度、岡本先生の学校では公開授業が予定されている。この貴重な機会を目に焼き付けておきたいと思う。

### 久保齋校長先生のお話

問題提起1…授業では、共同を強調しているのに、テストや評価においては子どもたちを分断し、孤立させ、競争させている。これでは子どもからの信頼は生まれない。授業だけでなくテストの準備の最後の最後まで共同を求める取り組みでどの子ども伸ばす取り組みをする。

この問題提起に、あなたはどう感じるだろうか。教師は授業に力を注ぐ。子どもは、それに応えて精一杯理解しようとする。ただ、テストはどうか。あんなに楽しく学んだのに、なぜか点数が取れないということが起きていないだろうか。その理由は、理解を授業のみにしているからだ。本来、授業だけでなくテストの解き方まで理解させるべきである。しかし、そこまで取り組む教師はいないのだ。結果、できる子とできない子という学力差が生む。この違いは授業で理解したことを再構築できているかどうかだ。テストで点数が取れる子は必ず自己学習をする。逆に取れない子は、授業の理解にエネルギーを消費し、その場限りの学習で終わってしまう。だからこそ、テストにおいても自己学習ができるように仲間と協力して取り組むべきなのである。

目標はもちろん満点である。「満点を取る」という目標を宣言し、再学習を仲間と進めることで、深い理解への一歩を踏み出すのである。クラスで勝ち取った満点は、子どもからも保護者からも信頼を得るこ

とができる。それ以上に教師の覚悟が必要なのは言うまでもない。

では、どのようにテスト勉強の時間を生み出すのか。例えば、八時間完了の所を六時間程度で終えて、残りの二時間でテスト勉強も兼ねた授業をすればよいのである。難しい場合は、最初の十分間をテスト勉強の時間にあててもよい。一人でさせるのではなく、共同で学習させる。テスト勉強のやり方は、ノートを半分折り、左半分は問い、右半分は答えを書く。様々なペアで問題を出したり解いたりすることにより、テストに対しての理解が深まるだけでなく、テストを通して仲間づくりもすることができる。テスト後には、自分がどれだけ成長したかを前回のテストやクラスの結果を見せることで、一人ひとりの学習に對しての態度も変わる。もし、思うような結果が出なければ、もう一度テストを行えばよい。大切なことは、教師が授業で終わりでなくテストまで責任をもって理解させることである。

## おわりに

今回、先生のための学校は大阪で行われた。夏休みということもあり、愛知から3時間かけて講座を受けに来た。今の世の中、行かなくても学べる機会は多くある。ユーチューブにエックス、インスタグラムなどいつでもどこでもだれからでも学べる。人によっては「会う必要はない」「時間の無駄」「お金をかけなくても学べる」などの考えもあるだろう。ただ、目の前にいるようではない画面を見ながらの学習に学びはあるのだろうか。自分自身、ついつい別の仕事をしていたり頭が痛くなったりと集中できないことがときどきあった。話を聞きながら、質問したいタイミングで聞けなかったり、時間とともに終わってしつたりとズームの講座にわずらわしさを感じる。だから、今回の先生のための学校が対面で行われることが正直うれしかった。お金と時間をかけてでも会いたくなる・聞きたくなるのがこの会である。

「お金も時間もかかるから行かない」という考えもあれば「お金も時間もかかるから行く」という考えもある。効率的なもの

ほど、理解はしているが深い理解には至っていないのが実感としてある。お金をかけなくても非効率の中にこそ、学びの価値がある。それは自分の手で、汗をかくこと、恥をかくこと、文を書くことで深い理解が始まるからである。忙しい日々を追われて、本当に大切にしなければいけないことを見失いそうになってしまいが、初心にかえって自己研鑽をしていきたい。先生のための学校では、聞いて学ぶだけでなく、聞かれて自分の実践を振り返ることもできる、終わった後には、まとめを書きながら次に生かすことができる。この経験が、自分自身を成長させることに遠いようで一歩の近道であると考え。一人でも多くの人に先生のための学校の下さを発信できたらと思いつつ、今後も学び続けたいと思う。

# 局長だより 9月

◇学力研最新情報 岸本ひとみ

●対面？ハイブリッド？

オンライン？

今、学力研の常任委員会での議題は、もっぱらこれです。

常任委員会というのは、学力研の運営をどう進めていくのかを話し合う場であり、理論研究、実践交流の場でもあります。いわば、学力研の最前線です。コロナ禍の際、全国フォーラムの中止を決めたのもこの会議、オンライン移行の後ハイブリッド開催を進めてきたのも同様です。

●対面が主オンラインも

対面の学習会だと、実践を語る人の息づかいまで見えるし、ちょっとした自分との違いまでわかることが魅力です。難点は、会場まで行かないといけないので、遠方からの参加は難しいことです。

いろいろと意見を戦わす中で、やはり、学力研としては対面の学習会を中心に進めていきたいと考えています。実践を語る人のエネルギーや、子どもたちのリアルな

変容が、ひしひし(ピンピン)伝わってきて、聞いている側もそのエネルギーをもらえるところです。

となると、考えないといけないのが参加費です。会場を借りるので会議室費が必要です。提案者への交通費や、資料作成も自腹というわけにはいきません。学力研は、これまで比較的廉価で学習会の参加費をいただいていたのですが、無料ではないということが、けっこう高いハードルになります。

これまで、無料で、オンライン講座で、ということに慣れた方にとっては、負担が大きくなってしまうのが悩みのタネです。

●いつからいつの講座から

新年度からがいいのか、オンライン講座も残すのか、などなど。年内いっぱい、議論が続きます。学力研のいいところは、時間がかかるけれど、みんな議論して、納得した上で、着地点を決めるところなので、喧々諤々はいつものことです。よかったら、常任委員になって意見を下さいませ。

◇事務局だより 岡本 美穂

●第18期先生のための学校

久保先生のテーマです。

●百点満点大作戦で子どもが変わるクリスを変えろ

●学び合いで育てる自治の力

●算術から算数への展開を

通って

●「モンジャ」の学級へ

【説明文の指導を通じて】

●学び方をクラスの共有財産に

●びびやキ漢字ドリルの活用法

●授業と授業目的

物語文の指導を通じて

●自治意識を育つ最後の取り組み《自発性》の強要は自治の萌芽をタメにする。

①オンライン会場 (七尾はなびら) 会場

費:1,000円

<https://www.kokuchpro.com/event/>

7942478cd6e9165302175d93b7  
940717/

②オンライン会場(オンライン) 無料  
<https://www.kokuchpro.com/event/d39ea19dbd2d29cd139e27b17f68916/>

③オンライン会場(たかこガーデン) 会場:1,000円  
<https://www.kokuchpro.com/event/603fb363102a60d74beb5115c5c17828/>

④オンライン会場(オンライン) 無料  
<https://www.kokuchpro.com/event/d2a674fb0af4c64c1fdd544f63ac4a20/>

⑤オンライン会場 (たかこガーデン) 会場:1,000円  
<https://www.kokuchpro.com/event/5713995fe1bc5a47dc91be44d9ae92ff/>

⑥オンライン会場(オンライン) ZOOM 無料  
<https://www.kokuchpro.com/event/9d77ae09ace6017c3ba57e8766d4af4c/>

# 学力研カレンダー



《各地のサークル・部会 2024年 9月 例会、イベント》

どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしております。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

## 9/

- 20 (金) 伊丹学力研 18時半～ ※阪急武庫之荘駅近く 前田 090-9715-3830  
21 (土) みなみ学力研 9時半～12時 阿倍野区民センター 図書 nobu580701@yahoo.co.jp  
27 (金) いろえんぴつ (加印) 18時半～ 天満南小学校サークル室 岸本 090-9117-6330  
27 (金) 春日井学力研 18時半～ レディヤン春日井(JR勝川駅) 山口 080-6904-1697  
28 (土) 大阪教育サークルはやし 午後 エルおおさか 荒井 aik28501@bca.bai.ne.jp

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等のご連絡下さい。

○持ち方書き方研究会 ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を 前田 090-9715-3830

○神奈川学力研 奇数月の第2日曜

## 《全国キャラバン等 今後の予定》

### ○学力研・先生のための学校【全6回】

- 8月25日(日) 13時半～16時【済】 9月14日(土) 13時半～16時  
10月12日(土) 13時半～16時 11月9日(土) 13時半～16時  
2025年 1月18日(土) 13時半～16時 2月8日(土) 13時半～16時

対面講座：8月(エルおおさか)・10月・1月(たかつガーデン)

○1年生講座 第6回 9月28日(土) 13時半～14時半 オンライン

(詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで)

(講師派遣希望、サークル情報などは 事務局へ fax:079-425-8781)

ご意見・ご感想は下記まで

荒井 賢一 E-mail aik28501@bca.bai.ne.jp

李 詩愛 E-mail iwamotoshie@gmail.com

堀井 克也 E-mail katsuya4k1h9@gmail.com